

## 歯科医療と文化の香り

齊藤 佳雄

時に一本のメタルボンド冠を装着して、Kranke と共に僅かな喜びに浸ることあったとしても、硬いコアを長い時間をかけて撤去している時や、難しい根管拡大に時間を費やしている時には、何と歯科医療とは地味な、心の沈む行為の多いことかと胸の内が暗くなる。

まして、政治に関わる力もなく、巷の一開業医として過ごす日々は、若き日の熱意と情熱などは遠い昔に置き忘れ、まことに淋しき professional なことよと嘆きたくもなる。

振り向けば、わが青春の時は遠く去り、人生の良き時代は幾許も残されてはいないではないか。

これから先もまた同じ日々が続くかと思うと、夢なく、希望なく、人生とはかくも儚きものなのか。我々は、歯科医としての人生がいつまでも続くと思いついでいるのだろうか。

さて、石垣島の青珊瑚礁、白神山地のブナ原生林を含め、地球規模での自然の保護、破壊の防止が叫ばれて既に久しい。

この時代にあって私たちは、相も変わらず口腔内という自然(天然歯)をあまりにも破壊(削去)し続けてきてはいないだろうかと思いついでいる。

美しい一枚の絵、感動を呼ぶ音楽、いつまでも忘れ得ぬ一編の小説が文化の一翼を担うものであるとするならば、咀嚼機能を回復し、固有の美しさを再現する歯科という素晴らしい領域をも”文化”という視点でとらえて、救いを求めてみたい。

本来”科学”である Hard としての歯科医療を、”文化”として、心の問題として soft に受け止める方向性が、歯科界にも今必須であるとの思いを強くしている。

しかし、歯科医療を”文化”として私たちが意識すること、社会から認識してもらうことは、まだまだ内なる多くのハードルを越えなければ到達し得ないかもしれない。

一般医療におけるホスピスに関する多くの問題提起は、私たちに相当なエネルギーを持って取り組まなければならないことを示唆しているように思う。

雄大な自然の山々や、いつまでも変わらず滔々と流れる大河の堂々たる静かな姿に接する時、日々目新しいいうことに目を奪われ、新材料・新技術といわれる治療行為に安易に取り組もうとする姿勢は、何と小さく、軽い存在であろうか。

歯科医療発展途上国ならいざ知らず、私たちはいつまで歯科の医療行為を方法論として捉えているのだろうか。かなり成熟したこの分野を、もうそろそろ”文化”として捉えてみる意識が必要な時でだと思ふ。

我々は”文化の担い手”なのだ。

5年、10年、20年の歳月で臨床を振り返ってみると、基本の基本に忠実で、結果を急がず、生体(自然)をいじめず(削らず)、静かに見守りながら(指導と管理)、できるだけ手を加えずに(最小の医療行為で)、残してきたもののみが(口腔内で)生き続けている。

人に自然(天然歯)は造れないのである。歯科医学の常識と長い臨床結果は必ずしも一致しないこともある。

文化も歴史も医療行為も、時間という洗礼を受けて、初めて評価がなされているということをいつも忘れずにいたいと思う。

最近、『最小限の努力で最大限の効果を求むるなかれ。最大限の努力を払っても、最小限の効果しか得られぬのが常である』という川島吉良氏の医学生に対する言葉に想いを新たにしました。

いつの日か、自らの医療行為が、時を経て静かに息づいている姿に接した時、私たちはようやく、心の安堵が得られるものなのだ気が付くかもしれない。この時、暗い日々の臨床の中にも、少しばかりの『文化の香り』への憧れがやっと芽を出し始めるのである。